

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

小牧近世文書研究会代表
服部正彦

第8回 小牧山城と信長 1

小牧山城のまちづくり

信長の次の目標は、美濃攻めです。清須城は常に五条川が氾濫している、兵の移動が困難なため、信長は小牧山に城を移すことにしました。しかし、住み慣れた清須を離れると家臣に命じれば、不満がでるのは目に見えています。ならば、とても住め様な辺地をあげた後に、改めて良い地を示せば、喜んで従うだろうと考えました。

そこで、まずは二宮山（犬山市楽田の本宮山）に城を建てるように命じました。そこは高い山で、住みにくいうえに河川からも遠く、荷物の運搬が困難な土地です。家臣達は何故その様な場所に城を築こうとするのか理解できません。佐久間右衛門は楽田城代の坂井右近、佐々成政や家臣の余諱正明に相談しました。皆に不評の二宮山移転を何とか殿に思いとどまってもらえな
いだらうか、と。話合いの結果、美濃攻略に都合が良くまた、



住みよい小牧山への築城を提案することになりました。彼らの進言を聞いた信長は、内心にんまりとしたことでしょう。小牧山築城は永禄6年（1563年）、重臣の丹羽長秀を作事奉行に命じて実施しました。城の材木は八曾山から切り出したといっています。

小牧山の城の構えは、山の中腹から山麓にかけて、信長の居館、正室・側室の座敷、重臣たちの屋敷、山麓の南の平地には、侍屋敷、神社や寺、足軽長屋、厩、倉庫などが配置され、城下町には、商工の職人達を清須から移住させ、町は鍛冶屋町・新町・油町・紺屋町・御園町などと名づけられています。

まちづくりについて、小牧城下町概念図（小牧神明社旧蔵）によれば、



小牧城下町概念図（小牧神明社旧蔵）



新町遺跡出土資料
（小牧市教育委員会）

小牧山東の合瀬川より西に南北に約1・5km、東西約1km、南に堀を設けて敷地としました。図面には、武家屋敷、馬揃広場が記載されていますが、新町に武家屋敷があったことが、これまでの発掘調査で明らかになっていきます。発掘された食器類や雑用品等から、当時の日常生活が推察できます。

また、この永禄6年は金神七殺（金神は暦神の一つ）にあたり、それを犯せば祟りがあると人々が言うので、城の鬼門にあたる方角に清須の御園神明社を勧進して鬼門鎮守としました。

信長は、そこに住む人々が安心して生活ができるように、何事も皆の意見をよく聞いて行った人で、決して「うつけ者」ではなく、人情の深い人でした。

「町人の信頼なくして

町はつくれず」

問合先 文化振興課 ☎ 76 1189